

奇蹟の生命—その1 物語の始まり

川口幸宏

その森はフランス共和国タルン県ラコーンの人々の里山である。里山にはラ・バザンヌという名が付けられていた。人々は春から夏にかけて森に入り込み、繁茂する柏の木枝を刈る。調理用や暖房用の薪を得るためである。秋になると栗拾いに女・子どもも入り込む。南国の太陽と雨は大地に多くの恵みを与えていた。

ラコーンの村人の中で奇妙な噂が流れ始めていた。

「黒大根とジャガイモが荒らされた。イノシシの仕業だろうか。」

「イノシシがラ・バザンヌまで降りて来てる、って？」

「いや、イノシシじゃあない。イノシシがラ・バザンヌで降りてくる時は、奥山の方に食べ物が無くなった時だ。ずんぶんと長い間、奥山はキノコも豊作だっていう話した。イノシシが里山に降りてくる時は、奴らも命懸けでさ。」

「じゃあ、あいつの仕業に違いない。」

森の縁の野菜畑が、このところ、よく荒らされる。しかしイノシシのような荒らし方ではない、イノシシの足跡ではなく人間の子どものものらしい足跡が残されているだけだった。人々は、盛んに「あいつ」についての情報を交換しあったあと、今度は是非その正体を突きとめようと、相談を纏め、それぞれ夕餉のために帰宅した。

数年前から、木を刈りに山に入ると、人影のようなものがこちらの様子をじっと窺っている、そちらに近づこうとすると、さっと木陰に姿が消えてしまった、子どもたちが栗を拾いに行ったらようやく一人が入れるほどの小さな小屋があった、小屋といっても、木枝で屋根だけを作ったようなもの、人糞のようなものがその回りを取り囲んでいた、いたずら好きの子どもたちがそれを壊してしまった、数日後に行ったら別の場所に小屋が造られていた、森の中で、白くふわふわとしたものが動くのをよく見かける、けっしてこちらに近づこうとはしない、「あいつ」は素っ裸だ。

村人たちが交換しあった「あいつ」についての情報である。村人に直接危害を加えないのならともかく、畑を荒らされるようになったとなれば、放って置くわけにはいかないだろう。

翌朝、数人の村人が、ラ・バザンヌの少し中に入った所にあるくぼみに身を潜め、「あいつ」が現れるのを待った。その日は骨折りだった。その次の日も骨折りだった。その翌日、くぼみに潜んだ6つの目が、確かに「あいつ」を捉えた。真っ裸の少年、そう、正真正銘、人間の子どもが森の縁の畑に入り込み、黒大根とジャガイモとを掘り出し、森の中に帰っていったのを目撃したのである。村人には6、7歳に見えた。

「誰かが捨て子にしたのか？」

「ラ・バザンヌに？ 迷惑な話だ。捨て子だったら、村で育てなきゃならん*。」

「ラコーンには、捨て子にしなきゃいけないような子はいないなあ。そんな話、聞いたことがない。」

3人の村人は、その後のことを考え、「あいつ」を捕まえようとはしなかった。妖怪でもない、怪物でもないただの小さい子ども、多少の畑荒らしはされるけれども受忍できないほどではない、畑荒らし以外の悪行の話は誰も聞いたことがない、つまり、女・子どもに危害が加えられるという危険性はない、だとすれば、「あいつ」をそのままにしておいてもかまわないだろう。

ラコーンの村人のひそひそ話は、3年ほどの年月を経て、周辺の地域の人々へ、さらにはアヴェロン県の首都ロデーズにも伝播していった。物見高い者、好奇心旺盛の者、一攫千金を狙う者、未開人の開明化を志す者などなど、さまざまな人間がラコーンに押しかけ、ラ・バザンヌに入り込んだ。中には「あいつ」を捕らえたと吹聴する者がいたが、結局は手ぶらであったことが何よりも実態を証明している。

3年有余、ラコーンの村人と「あいつ」との関係はつかず離れずで平和そのものであった。村人は、「あいつ」が、獐猛な獣をやっつけたのを知らないし、まるで魚のように川や溜め池を泳ぎ回っているのも知らないし、リスのようにスルスルと木を登るのも知らない。いつもの如く「あいつ」は、農作業や木こり、木の実拾いの時に、ちょっと離れた所で、時折姿を見せるだけであった。しかし、功名心溢れ、教養に溢れ、息をする暇もないほどに弁が立つ訪問者たちの口にかかる、「あいつ」は一気に怪物化してしまっていた。村人たちも煽られ、「あいつ」を次第に「ラ・ベトゥ（動物的人間）」として認識するようになった。ラ・ベトゥならば始末しなければならぬ。生け捕りにして、うまくいけば、「見せ物

* 「棄て児」対策として、拾った者が育てなければならない決まりになっていた。個人でできない時にはその地の共同体の共同責任で養育する義務が定められていた。

小屋」に高値で売り飛ばせる。

その日、ラコーンの猟師 3 人が、いつものイノシシ狩りのいでたちで、ラ・バザンヌに入った。猟犬が「あいつ」をすぐに見つけた。追いつめられた「あいつ」は木に登って逃れようとしたが、リスのようにスルスルとは登れず、あっけなく猟師の手に落ちてしまった。ラコーンの駐在所に連れて行ったが、多少攻撃的に噛みつきはするが、あとは垢にまみれたただの裸ん坊である。エラもなければヒレもない、牙もなければ獣のような尖った爪もない。両膝をやや曲げて歩きはするが、四つ足での歩行はしない。もちろん猿のようなシッポはない。普通の幼い子どもと違うところは、泣きも叫びもしないことぐらいなもの。隙を見ては逃げ出そうとするその敏捷性だけがただ者ではないと感じさせられた。

まさに「幽霊の正体見たり枯れ尾花」である。これでは、かの物見高い都会人のための「見せ物」として高値で売り飛ばす値打ちなど何もない。人々の興奮は急激に汐引いていった。そして、「この子をどうする？」という、村人が「育て親」にならなければならない心配の波が改めて襲ってきた。

エレンは先年夫を亡くした。子どもが授からなかったこともあるのだろう、ラコーンの村中を通り抜ける物乞いや浮浪児たちに一夜の食事とベッドとを提供する非常に慈悲深い女性であった。エレンは「あいつ」の身柄を引き受けた。村人たちの賞賛を得た喜びでいっぱいであった。

エレンは、手慣れた風に、「あいつ」に食事を供しベッドを準備した。シャワーで身体を洗ってやった。そして真新しいワイシャツとズボンを彼にプレゼントした。「あいつ」の激しい抵抗に遭いながらも、慈しみの心を決して失うことはなかった。

食事はライ麦パンとジャガイモ入りの牛乳のスープ。パンは、匂いを嗅いだあと、ほんのひとかけら口にしただけで放り出した。スープは、やはり匂いを嗅いだあと、スプーンを使わず皿をあおって飲もうとした。結局スープもほとんど飲まなかった。ただし、テーブルにこぼれたジャガイモを手づかみで食べた。水差しからコップに水を注いで彼の前に置くと、一気に飲み干した。そのあと、水差しをじっと見つめていた。エレンが「もっとほしいの？」と訊ねたが何の返答もない。水差しを注視し続けるだけであった。それでエレンは水差しからコップに水を注ぐと、またもや一気に飲み干した。それでもまだ水差しを見つめていた。今度は、エレンの手を握り、水差しの方へその手を持って行った。そして次の食事の時から、エレンの手を取り水差しにエレンの手を添えさせて、水を要求するようになった。シャワーは、はじめ怖がる様子を示したが、すぐに馴染んだ。ただし、身

体を洗うことは拒絶した。真新しいシーツカバーのベッドは彼の気にいらなかった。彼はベッドから降り床に直に寝ころんだ。しかし寝付かなかった。やがてベッドの布を破り藁の中に潜り込んだ。そしてすぐ眠りについた。ベッドで寝るのは夜だけではなかった。日中の半分ほどはベッドの藁の中に潜り込んでいた。

エレンは、数日間は根気よく、彼に声を掛け、彼の気にいるように生活の工夫をした。しかし、ウンともスンとも言わず、普通の浮浪児ならば食事の時に十字を切って神への感謝を示すのに、「あいつ」はそうではない。パンもほとんど食べない、スープは皿をあおり飲みこぼす、3日目からは皿のスープに手を突っ込み、ジャガイモだけを食べるだけとなった。

ことほど左様に、まことに野蛮な (sauvage, wild) 振る舞いを繰り返すばかりであった。ただ、供されたワイシャツはお気に入りであったようで、シャワー以外の時は片時も脱ごうとはしなかった—エレンが強制的に脱がせたのだが—。エレンの慈善と憐憫の感情をいやでも呼び起こしてくれる浮浪児との対話の楽しみは、いささかも満たしてはくれなかった。それでもエレンのやり方を彼が受け入れたことはある。パンもスープもほとんど口にしない彼のために、エレンは、考えに考え、焼きジャガイモを食事に供するようにした。彼の前でジャガイモを火中に放り込む。ほどよく焼けた所で取り出し皿の上に乗せしばらく熱を冷ましてから彼に食事として出した。焼きジャガイモはことのほかお気に入りの様子であった。

「あいつ」はエレンの家に 8 日間留まっただけで、ラコーンからふつりと姿を消した。あの里山にも二度と彼の姿を認めることはなくなったのである。

「あいつ」がラコーンから姿を消して 6 か月ほど経ったその年も終わりの日の朝 7 時、ラコーンから 15 キロメートルほど離れた山岳地帯の小さな村アヴェロン県サン・セルナンサン・セルナンの村はずれの民家に、この厳しい冬だというのに、帽子も被らず、靴も履かず、ズボンも身につけず、ボロボロになった布だけを身につけた少年が、入ってきた。家の主ヴィダルは少しも慌てることはなかった。というのも、この少年は、6 か月ほど前から、しばしば村にやってきていた「顔なじみの浮浪児」であったからである。村に来ていたとはいっても民家に入り込むことはこれまで一度もなかったから、この日の出来事はそれまでと違ふところであった。一方で、ラコーンの「あいつ」の話はこの村にも知れわたっており、村人の中には、ラコーンの未開人 (l'homme sauvage) ではないか、というのもあった。人々は、

ヴィダルの暖炉付き納屋に閉じこめられていたボロ着の少年を見物に来た。この地方の副知事を務めるコンスタン・サン・エステヴェもその一人であった。

コンスタンが訪れた時、少年は火の傍にいた。火は、厳冬の痺れるような寒さを遠ざけていたからであろうか、少年は火をととても喜んでいる様子であった。コンスタンはその次に、少年が身につけているぼろ着を見た。間違いなく報告が上がっているラコーンの未亡人が与えたワイシャツであった。コンスタンは、ラコーンから突然姿を消した少年は完全に野生に戻ったと信じていたが、目の前に再び姿を現した「あいつ」は、元の野生人のままではないことに気付いた。報告で知る限り少年は、少なくとも4年、いやそれは人前に姿を見せるようになってからのことであるからそれより数年は遡って、どんな寒さであろうが被服や火で身を守る習性を身につけていなかった。それにもかかわらず、コンスタンの前にいる少年は、たとえワイシャツであろうと6ヶ月間も身から離すことはなかった、そして火を慈しんでいる。しかし少年は、彼を見つめる人々の多くの目に怯えているのも事実であった。

コンスタンはしばらく少年を黙って見つめていたが、やや経って「ボンジュール」と少年に声を掛けた。返答もなければ聞こえているふりも見せない。声を高く低く、大きく小さく、さまざまに変化させて声を掛け続けた。「暖かいかい?」「名前は何というの?」「いつもどこで寝ているの?」……。しかし少年の反応は皆無であった。「この子は聾啞者だ!」コンスタンは少年の手を取り、自分の方に導こうとした。しかし少年はその手を引き離そうと強く抵抗した。それでコンスタンは自らが少年の方に身を寄せ、少年の両手を彼の両手で包み込んだ。優しく優しく声を掛けながら。続いて、少年の両の手をゆっくり柔らかく撫でた。何度もそれを繰り返す。少年の身体から力が抜けていくのを感じたコンスタンは、少年の手に、2度口づけをした。少年の身体からすっかりと力が抜け、顔が和らぎ、コンスタンの方に身を寄せていった。「このままでは、この子は見せ物になってしまう。とにかく我が家に連れて行こう。きっと腹を空かせているに違いない」。

コンスタンの自宅までの1キロほどの道のりを馬車が走る。コンスタンと手をつなぎあっていた少年は車窓の向こうに広がる野菜畑を見て、コンスタンの手をふりほどこうとし、今にも馬車から降りそうな構えを見せる。コンスタンはこの哀れな少年が腹を空かせていること、そして彼の日常の食料が畑の生野菜であろうかと想像した。馬車が街中に入ると少年は、コンスタンの手を以前にも増して強く握った。コンスタンは優しく少年の手の甲を撫でた。

家に着くとすぐ、コンスタンは使用人に命じた。

「大きな皿に、焼いた兎肉と生の兎肉それぞれ一切れずつ、それからライ麦パンと小麦パン、あとは、リンゴ、洋梨、ブドウ、クルミ、生のクリ、ドングリ。それとジャガイモもだ。生のジャガイモを。それに、アメリカボウフウの根、オレンジを一個ずつ盛りつけて出してくれたまえ。」

コンスタンは自宅で食する食材で思い付く限りりを口にした。使用人は「そんなにたくさん、この子が食べるのですか？それにしても、身なりも貧相ですし、汚いし臭い。いったいどうなされたというのです？」と、主に命じられたものを一つひとつ確かめ皿に盛りつけながら、半ば歓迎されざる客を招いた主への抗弁をこめて、訊ねた。

「この子のことについては、あとで詳しく説明する。とにかく今は、この子が腹をすかせているだろうこと、それにたったさっき会ったばかりだからね、この子の好みは何か分からないから。」

暖炉の傍で背を丸めてしゃがみ込んでいる子どもの前に、使用人は盛りつけたばかりの大皿を置いた。コンスタンが「さあ、どれでも好きなものを、自由に食べるがいい。」と言い終わらないうちに、少年はまっすぐジャガイモに手を伸ばし、暖炉の火の中へ投げ込んだ。それから他のものを手に取り、一つひとつ嗅ぎ、皿に投げ返した。この行為をコンスタンは直ちには理解できなかった。少年は暖炉の中のジャガイモをじっと見つめている。ジャガイモだけを火に投げ入れただけで、あとのものは皿に投げ返したあと見向きももしない。コンスタンは、使用人に、もっとたくさんジャガイモを持ってくるように命じた。使用人はブツブツ文句を言いながら、10個盛りつけたジャガイモの皿を少年の前に、乱暴に置いた。少年は目をきらつかせ、それから両手でジャガイモをすべてすくい取り、そしてすべて火の中に投げ込んだ。やや経って、彼は、火勢が弱くなった暖炉の中に右手を突っ込み、焼けたものをすべて取りだした。熱さを覚え、苦痛を訴えた。けっしてうめくような声ではなく、明瞭ではないがよく響く声であった。それでも彼は、焼きたてのジャガイモを、熱さの苦痛を訴え続けながら、次々と口の中に放り込み、食べ尽くした。そのあと、周りをキョロキョロと見回し、水差しがあるのを確かめた。彼はコンスタンの手をくるむように取り、水差しの方へと連れて行った。そしてコンスタンの左手を叩いた。コンスタンは少年が水を飲みたいと要求しているのだと理解した。それを見た使用人がワインを与えたが、彼はいらだつ表情を示し、なおコンスタンの左手を叩き続けた。コンスタンからグラス一杯に注がれた水を一気に飲み干した。

質素な昼食が終わると、少年はすっと立ち上がり、入口門の方へと走った。そして、コンスタンの呼びもどす声を無視して、門を乗り越え立ち去っていった。コンスタンは後を追いかけて、ようようのことで連れ戻した。コンスタンは、後に、アヴェロン県の首都ロゼーゾにほど近くのサン・タフリク救済院に収容された少年に対する観察が行われた際、次のように陳述している。

「彼はいつもそうでした。私は苦勞して彼を捉えました。厭がるでも喜ぶでもない彼を私は連れ戻しました。私は彼を逆境にある人間として強い興味を抱いたのです。私は別の自然な感情—驚きと好奇心のそれ—を抱き始めておりました。パン、肉を拒絶し、ジャガイモを選ぶ、そういう好みの感覚を、彼は、生き抜き、手で長くつかませた大地の生活で身につけたように思われたのです。時々、非常な困窮に妨げられたけれども、その環境は全体的に満足いくものであったにちがいません。広大な環境を独り占めしているという観念が、この男の子は非常に幼い頃から、森の中で、欲求や社会生活とは無縁に生きさせてきたと、私は判断したのです。」

いつの頃からか、「あいつ」はル・ソヴァージュ・ド・アヴェロン(*le Sauvage de Aveyron*、アヴェロンの未開人。我が国では「アヴェロンの野生児」と称される。)と呼ばれるようになっていた。フランス社会が彼をこのように呼ぶには二つの期待が混じっていた。

一つはアンチ文明派、すなわちジャン・ジャック・ルソーなどの啓蒙思想家たちが人間の本性(自然性)を尊び、「近代化」に猛進することの危険性に警告を発するものであった。事実、ルソーは『社会契約論』の注記の中で、世界の幾つかの地域で「発見」された、人間社会(文明)に侵されていない子どもの実例を挙げ、ル・ボン・ソヴァージュ(*le bon sauvage*: 良き未開人)という架空概念で説明しようとし、同時に、人間の本性に従った教育のあり方—それは結局のところ個人のシヴィリザシオン(文明化)を謀ることなのであるが—を論じた小説『エミール』を公刊している。ルソーに倣って少年こそル・ボン・ソヴァージュである!と、貴族たちはサロンで、新興ブルジョアジーや教養ある職人親方たちはカフェで、盛んに議論し、それを奉公人たちに語り、奉公人たちは仲間に仕入れた新しい社会情勢をひけらかした。こうしてル・ソヴァージュ・ドゥ・アヴェロンはフランス社会の人気者となった。

あと一つは、植民地政策とからんでくる「文明化」の問題である。18世紀から19世紀にかけてヨーロッパ列強が競って中南米・アフリカに植民地を求める。労働力奴隷をアフリ

かに求める政策はやがて力を消していく運命にある過渡期のこと。植民地化＝属国化＝によって、略奪に拠るのではなく、天然資源や人的資源、社会資産を求め、国土の拡大を図った。そのことで「近代国家」としての内外権力を強大化していったのである。当然のことながら、植民地となる場所はすべて異文化である。異文化とどのように共存するかなどという発想・施策は、全くない時代であり、異文化を如何にして自文化に従わせるかが大きな課題となっていた。文明社会と自称する侵略社会は植民地の人・文化・社会・歴史をソヴァージュと呼んだ。それらをどのようにしてシヴィリゼーションするかが、植民地政策上、きわめて重視されていたわけである。もし可能でないと判断される場合にはどうしたのか？殺戮・抹殺するか隔離幽閉するかによって、もともと文明社会下には存在しないものとし、文明の安定・進出を謀るしか他ないはずである。

この二つは「文明」という概念を軸にして対極にあるかのように思われる。しかし、フランス革命政府はこの二つを統一した課題としてとらえ、精神医学、言語学、博物学、人類学、動物学等々の専門家を集め人間観察家協会を発足させていた。

ル・ソヴァージュ・ドゥ・アヴェロンの話しを伝え聞いた内務大臣一後の皇帝ナポレオン I 世の弟一が強い関心を寄せ、少年の身柄をパリに移し人間観察家協会の管理下で実験・研究を行うように命じた。人間観察家協会は少年を、サン・ジャック通りセーヌ川左岸、パンテオンより南に下がったところにある聾啞の少年たちのための教育施設に収容することを決定した。協会のメンバーの一人であり、聾啞教育施設の主席教師 R.-A. C. シカールが言語学者として、また聾啞教育者として優れた力量を持っていたことからである。

1800 年 8 月 6 日午後 10 時、薄暮のパリに、革ベルトで腰と腰とを繋ぎあった初老のボナテールと少年とが、南フランスからの長旅の末、到着した。彼らが行く先行く先には野次馬が群がっていた。『ラ・ガゼット・ドゥ・フランス』という新聞がふたりのパリ到着を知らせていたからである。人々は口々に言う、「あれがル・ボン・ソヴァージュか」「いや違う、単なるソヴァージュだ」。中には、「いや、あれは、シャラントンやラ・サルペトリエールやピセートルのイディオ(idiot：白痴者)だ」という者もいる。イディオもまた文明社会からはじき出されたソヴァージュの仲間である。しかし、イディオはほとんどシヴィリゼーションの可能性はない。救済院に隔離収容されそのまま人生を終える。野次馬たちの声は、少年がこれからどのように扱われるのかを、率直に予感させるものである。いずれにしても、金を払ってまでして見学したい「異文化」が、自分たちの前を通り過ぎていく

のである。群衆は興奮のるつぼにあった。

少年はほとんどボナテールに身体を密着させていたが、急に走り出しボナテールを転倒させもした。恐怖にかられた行動からであった。なにしろこれほどの人の群れと出会ったことなど全くない。そしてその人の群れからは奇妙なざわめきが伝わってくる。少年にとって何よりも恐ろしい雷鳴と同じであったに違いない。

群衆に一人の青年が混じって、パリの街中を歩いていくふたりを、じっと見つめていた。青年の名はジャン＝マルク＝ガスパル・イタール。1774年、プロヴァンス地方バス＝アルプ県オレゾンで生まれた。イタールと互いに守り合うようにして前を通り過ぎていくふたりとは後に非常に絆強く結ばれる関係となる。イタールもまた、人々と同じように、「ル・ボン・ソヴァージュか、はたまた単なるソヴァージュか、それともイディオか」と自問自答を繰り返していた。

取りたてて医学訓練を受けた経験もなく、また精神医学を学んだことのないこの青年医師が、子どもの精神医学や教育に大きな足跡を残すことになるとは、この時、彼自身も予想さえしていなかったであろう。しかし、この「自問自答」こそ、彼と、目の前を通り過ぎていった一人の少年のその後の運命に大きく関わるようになったのである。